

9期 知らなかった あんな話 こんな話 科

～そして生きがい再発見～

日時： 令和4年 1月20日

場所： 豊中市地域共生センター

学習テーマ：「外国人と共生する地域づくり」

講師： 牧里 每治 先生 （関西学院大学 名誉教授）

内容 コロナの急激な感染拡大と講師の自宅が遠方とのことで、本講座初めてのリモート講義となりました。音声はよく聞き取れたのですが、一方向のため質問などはできず、少し残念なところがありました。



(1) 顔の見えない在住外国人

外国人タレントや爆買いの観光客などは目にするが、在住、定住、移住、滞在、永住など多様な存在である外国人の顔、生活実態は見えにくい。（技能実習生、留学生、難民、移民等）

永住権 就労、教育を受ける等は可。納税
兵役の義務はあるが、参政権はない。

市民権 民主主義の基本的考え＝個人の自由を認める。参政権がある。



(2) 多文化共生のまちづくり

「排除」より「包括」が、「攘夷」より「開国」が、「排外」より「共存」が望ましいが、現実には難しいところがある。

非正規雇用による不安定な生活、相談者がいない孤立、更にコロナ禍での失職や生活困窮 など 社会全体が心身ともに余裕がない状況にあり、人が繋がって共に生きる事が難しい。この中で多文化とどう共生していくか？

(3) グローバル社会と日本社会

1950年のサンフランシスコ条約 1990年までの間、日本の国際交流は上層社会に属する人々による文化交流であった。

1990年以降、市場・情報・金融のグローバル化が進み、労働者も世界的市場に。

日本では、東京一極集中となり、地方が疲弊衰退する。家族が核家族⇒一人親家族の増加⇒一人家族へと 壊れていっている。

(4) 移民社会 USA の民族的コミュニティー

アメリカに移民した日本人は、行政に頼れない格差社会への抵抗と防衛のためにまとまって顔の見える関係の中で助け合った。(ex. サンフランシスコのジャパントウン 2世が1世のために老人ホームを建てた。ロサンゼルス、シアトルも)

ただ、コミュニティーの中に仕事がなければ3世、4世は外に出て行ってしまいうという課題がある。

豊国際交流センターは様々な国の活動の拠点となっており、オールド・カマーがニュー・カマーをサポートしている。

(5) ディアスポラ（民族的離散）の功罪

代表的なのはユダヤ人。

日本にはチャイナタウン（横浜・神戸）やコリアタウン（大阪鶴橋、東京新大久保）がある。時に偏見・差別・排斥の対象になることがある。

(6) シンク・グローバル、アクト・ローカル

思考は世界規模に、行動は身近な地域で 上層階層の異文化交流から、日常生活の中で外国人と関わるのが大切。

神戸南京町のエスニックレストラン、とよなかのカフェ・サバナ、山口絵理子さんのマザーハウス、他、学習塾や子ども食堂、スポーツやダンス等がある。

午後

ラジオ体操



授業の振り返り



成果発表会に向けた班活動

